

南の風にのって

板橋区立三園小学校4年 ^{ないとう}内藤 ^{わか}和香

みなさんは、「牛深ハイヤ節」を知っていますか。知らない人の方が多いと思います。では、徳島県の阿波おどり（よしこの節）や、新潟県の佐渡おけさなどはどうでしょうか。祭りの時期になると、テレビなどでよくほうどうされているので、知っている人も多いのではないのでしょうか。実は、牛深ハイヤ節が、有名な阿波踊りや佐渡おけさの源流になっているというのです。

私の母は、熊本県天草市牛深町出身です。私も何度か行ったことがあります。お世辞にもにぎやかな活気のある街には思えません。でも、母から聞いた話だと、春のハイヤ祭りの開さい時期には、県内外からも人が来て、大にぎわいになるそうです。

ハイヤ節の歴史は古く、江戸時代から伝わっています。テレビもなく、交通もふべんな江戸時代にどうやって日本全国に伝わったのか、疑問に思ったので、牛深ハイヤ節の伝わり方について調べようと思いました。

今回は、ゴールデンウィークを利用し、牛深に行きました。滞在中に、地元の図書館へ行き、資料を集めて来ました。そこで、ラッキーな事に、地域史研究家の吉川茂文さんに会えました。偶然立ち寄られていた図書館で私がハイヤ節について、調べていることを知り、吉川さんの方から話しかけてくれました。そこで貴重なお話を聞くことができました。

牛深は熊本県天草最南端に位置し、熊本県下最大の漁業基地であり、古くから天然の良港として知られた町です。

牛深ハイヤ節のもつ、熱狂的な南国特有のリズムは、沖縄のカチャーシーや奄美大島の六調に似ています。六調とは、奄美地方で結婚式などのお祝い事があるときに、三味線や太鼓（チヂン）で奏でる激しいリズムのことだそうです。

奈良・平安の頃から風と汐に乗り南に行けることを知っていた牛深地方の人々は、貝殻、サンゴ、干鮑等を求めて荒波を乗り切っていました。それらの産物といっしょに持ち帰った南国のリズムに当時熊本を中心に歌われていた二上り甚句で、味つけをして独特の節回しを持つ牛深ハイヤ節が生まれました。二上り甚句とは、本調子よりもさらに軽快な二上りの調弦で、歌われる曲で、かつての花町で盛んに歌い踊られた音楽です。

今では全国四十以上のハイヤ節系民謡があるということです。

北海道 江差餅つき囃子

青森県 津軽あいや節、津軽小原節

岩手県 南部あいや節

秋田県 秋田ハイヤ節、大正寺おけさ

宮城県 塩釜甚句

山形県 庄内ハエヤ節

茨城県 潮来甚句

新潟県 佐渡おけさ、山田のハンヤ、相川おけさ、赤泊おけさ、小木おけさ、選鉱場節、新潟おけさ、越後アイヤ節、出雲崎おけさ、寺泊おけさ、柏崎おけさ、地藏堂おけさ、はねおけさ、三崎甚句

千葉県 安房節

石川県 白峰ハイヤ節

東京都 大島節

京都府 宮津アイヤエ踊り

静岡県 伊豆下田節

島根県 隠岐ハイヤ節、浜田節

徳島県 阿波おどり（よしこの節）

広島県 三原やっさ節、鞆の浦ハイヤ節

熊本県 崎津ハイヤ節

山口県 般若踊り

鹿児島県 鹿児島ハンヤ節、阿久根ハンヤ節、川内ハンヤ節

佐賀県 呼子ハイヤ節

長崎県 田助ハイヤ節、生月ハイヤ節、樺島ハイヤ節

吉川さんによると、江戸の後期にさつま～大阪をむすぶ弁財船という船がありました。

上りは、さつまから、かつお節などの海産物を積んで、さつま～牛深～平戸～玄界灘～瀬戸内海～と船をすすめ、大阪まで行きました。下りは大阪から、生活物資を積んで、同じルートを下って帰りました。そのルート上に鹿児島ハンヤ節や田助ハイヤ節、呼子ハイヤ節、般若踊り、三原やっさ節、阿波踊り（よしこの節）があるのが分かります。

下りのルートの中には、さつまに戻らず、日本海を北上する北前船という船がありまし

た。この船は、途中で新潟の港に寄って、積み荷を売り、米と酒を買い、北海道の江差に持っていきました。これを西回りと言うそうです。そのルート上に、浜田節や宮津アイヤエ踊り、白峰ハイヤ節、佐渡おけさ、庄内ハエヤ節、秋田ハイヤ節、津軽あいや節、江差餅つき囃子があるのが分かります。

また、秋田から、米を積んで津軽海峡を通り、太平洋側を南下し、茨城の潮来～江戸まで運びました。これを、東回りと呼びます。そのルート上に、南部あいや節や塩釜甚句、潮来甚句、大島節があるのが分かります。さて、この東回りの航路。千葉県房総半島を回って、いよいよ東京湾に入ろうとする所で、伊豆半島を抜けてくる西風にあおられて船を先に進めることが困難になり、危険をとまなうので、銚子から利根川へ船を入れ、潮来で小さな船に荷物を積みかえ、川を利用して、江戸へ運んだそうです。なので、塩釜甚句が潮来に持ち込まれたようです。(地図参照)

当時の船には、エンジンがなかったので、港を出る際に南風がふいていないと、船は北へ向かって走れないのです。九州ではハエの風とよぶそうです。そのハエがなまってハエヤになり、ハエヤがハイヤになったそうです。

昔の船のかじとりは、一人で、一晩中眠らずに、見はり番をしていました。そのかじとりは、眠らないように、ずっと歌うことが義務づけられていたそうです。

風待ちの牛深で、ハイヤ節が歌われて、ハイヤ節を覚えた船乗りが、かじとりをしながらハイヤ節を歌い、次に寄る港へ伝えていったそうです。

このようにして、ハイヤ節は、日本全国に伝わって行きました。

私の予想は、有名な民謡歌手が全国を回り、流行らせた、というものでした。でも、まさか、船乗りたちの口伝で、広まったものとは、思いもしませんでした。

ただ、私は、これだけが理由で全国津々浦々に、広まったものとは思いません。みなさんもぜひ一度この牛深ハイヤ節を聞いてみて下さい。テンポの早い軽快なリズム。高音。楽しい歌詞。これがハイヤ節の特ちょうです。つい手拍子したくなったり、口ずさんでみたくなったり、踊り出したくなります。もし、これが、テンポも遅く、低音で、さびしい歌詞だったらどうでしょう。そこにも、全国に広まった理由があるような気がします。

今回は航路と伝わり方について調べましたが、歌詞や文化なども調べたらおもしろいだろうなと思いました。

《参考文献》

- ・『民謡その発生と変遷』角川選書〈126〉、竹内勉、角川書店、1981年
- ・『民謡手帖』竹内勉、駸々堂出版、1989年
- ・『第三回全国ハイヤサミットinうしぶか基調講演「ハイヤを語る」』竹内勉、1997年

八ノ節系統民謡

大阪 ↔ 北海道 北前船《西回り》



東北 ↔ 東京(江戸)《東回り》

鹿児島 ↔ 大阪《弁貝舟船》

牛深ハイヤ節

ハイヤエーハイヤ
ハイヤ今朝出した船はエー
どこの港にサマ入れたやらエー
エーサ牛深三度行きや三度深
綱釜売つても酒盛りやして来い
戻りや本渡瀬戸から渡り

ハイヤエー北風かど
思えばまた南風の風ヨ
風さえ鹿路のサマ邪魔をするエー
エーサ黒島沖からやつて来た
新造か白帆か白鷺か
よくよく見たればわが夫様だ
ハイヤエーハイヤ
ハイヤ半年や暮すエー
あどの半年やサマ 捨て暮すエー
エーサ段々畑のサマ豆は
ひとサヤはしれば音はしる
私しやお前さんについて走る

ハイヤエー大船
片島片瀬かけてヨ
なせに法ヶ島がサマまけたやらエー
エーサ南風の風やさうめん北東風やだして
沖海風いれこ味やよから
もついでこ味やよから

ハイヤエーとちやを投げ
とちやを投げ三十四五投げたエー
投げた枕にサマ寝はないエー
エーサ何処から来たか、産摩から
いかりも持たずにようきた様だ

ハイヤエーハイヤ
ハイヤは何処でもやがるエー
牛深ハイヤはサマ元ハイヤエー
エーサ川端石だ、起せば蟹だ
蟹の生焼きや食傷のもとだ
食傷蟹なら色なし蟹だ
押せ、押せ、押せ、押せ、押せ
押し、押し、押し、押し、押し

ハイヤエーたんど
売れても売れない日でもエー
同じ鯛子のサマ風車エー
エーサ魚買万匹、改事餅、宮崎餅、骨
横ぐわえ加世浦キヒナゴ運すこ
天照渡れば雲津の魚、二入なめたら
どつとした

ハイヤエー船は
出でゆく、帆かけて走るエー
茶屋の娘がサマ出て招くエー
エーサあおきやうたんとん居いたか
届いて煮て吸って舌焼いたサイサイ

ハイヤエー沖の
瀬の瀬にドンと打つ波はエー
あれは船頭さんのサマ皮馬定めヨ
エーサ海現山から後ろ飛びやするとも
お前さんに暇は、やいもせんば
取いもせん

ハイヤエーまつヨ
まつヨ黒島の松エー
上り下りのサマ手掛け松エー
エーサ算盤続て考えた
一桁違えば大きな損だよ

田原の送り松明について

逗子開成中学校3年 ^{うえにし}上西 ^{ゆうき}勇輝

「今日は送り松明をやるから見てったらええよ」そのおばあちゃんは僕にそう言った。丁度お盆の終わりで奈良県高取町に来ていた。JR奈良駅から車で30分程しか離れていないが、訪ねる人はほとんどなく、バスも1日3、4本しか通らない寂れた村だ。僕はここにある、春に見損ねていた太安万侶の墓を訪れたのだが、知り合いのおばあちゃんに墓までの道を教えてもらった、こう言われたのだ。

“送り松明”という聞き慣れない言葉に耳が興味を示した。都会で生まれ育ち、両親もそうである僕には“松明”と言われていても見当もつかない。“送り松明”などというと僕には京都の“鞍馬の火祭”のように町人全員が炎のついた長い棒をかついで町を練り歩く光景しか思いつかない。しかし、実際はおばあちゃんが手伝いの孫娘と2人きりで乾燥させた植物の軸（オガラ）に新聞紙を巻いた小さい松明に火をつけて、家の門口に立てるのだ。オガラは昔は山に採りに行ったそうだが、今は買うそうだ。ご先祖様に長くいてもらうため“送り松明”はゆっくりやるということも教えてもらった。

“送り松明”が終わった後に、おばあちゃんは興味深い田原の風習について色々教えてくれた。例えばこの日の朝は小豆がゆ、昼にはナスビの味噌和え、夜はソーメン、ゴボウと里いもの煮つけ、と行事食が決まっている。正月元旦には鏡もちの周囲に12個の丸いもちを配置するそうだ。このもちは1箇所だけ三日月と太陽のような形をしたもちを置くという。それを「センマイセンマイ」と唱えながら拝む、といった事も教えてもらった。

でも、不思議に思ったことが一つあった。このような行事のやり方を、同居している家族はほとんど知らないそうだ。息子夫婦は共働き、時々孫が手伝ってくれるが、そのやり方はおばあちゃんの頭の中にあるのみだ。でも、おばあちゃんが高齢で、村の過疎化も進み、風習を覚えている人も少なくなっていく。今話を聞いておかないと、これらの風習は「誰にも知られないまま消えていく風習」になってしまうだろうと思った。ささやかに繰り返されるこれらは、もう消えてしまうのだろうか、もしくは、どのように伝えていくことができるだろうか。お盆の時期に、亡くなった人を静かに想う田原の光景は、いつか見られなくなるのだろうか。

また、おばあちゃんからは、このあたりは奈良時代にはすでに人が行き来し、今、田や畑を耕したりすると刀や甕が出て来ることも聞いた。僕が訪ねた太安万侶の墓も茶畑の主人が開墾しようとして偶然棺を掘り当てたそうだ。でも、もしこの土地の人が同じように何かを掘り当てたとして、それが歴史的な出土品かどうか分からなかったとしたら、その品々や墓などはどうなってしまうのだろうか、と思った。「誰にも知られないまま捨て置かれるもの」になってしまうしかないのだろうか。奈良に都があった時代から人が足を運んだここに根付く風習や物が見過ごされ、忘れ去られてしまうのは、当時の人の思いや暮らしが伝えられず、現代に生きる僕達は当時のことが理解できず、残念だ。僕はその日、高松塚古墳にも足を運び、海獣葡萄鏡という国宝の鏡を見てきていた。この鏡は古墳の埋葬品の中でも盗掘を免れた数少ないもので、僕は大変感動した。ロマンを感じた。その後、銅鏡作りのワークショップに参加し、自作の鏡を磨きながら再度ロマンを味わった。しかし、たくさんの古代からの暗号を秘めた鏡が、もし、誰の目にもとまらないまま土に埋もれていたらと想像すると、やはり残念な気持ちがわいてきた。

田原を後にする前に、おばあちゃんは『田原のくらし』という小冊子を貸してくれた。それはこの土地の行事・風習についてまとめたものだったが、それぞれの由来などには特に触れられていなかった。

ここまでの話は、言語間の「翻訳」の話にもつながる部分があると僕は考えている。僕はこの夏もう一つ自由研究に取り組んでいて日本の歴史的な事柄も扱っている手塚治虫の『火の鳥』はどう英訳されているのか、というものだ。その調査の中で、英語の専門家の人に話を聞くと、「言語の翻訳をする際、訳者は両言語の歴史や文化に通じていなければならない。言語の背景、特徴が違うため、100%の翻訳は存在しない」と言われた。また、面白いことに、調べてみると太安万侶は『古事記』の冒頭で、日本は当時自国の文字を持たず、漢字で表記する際にさまざまな工夫をしたと書いている。他国の文字でヤマト言葉を表記する工夫が万葉仮名だ。つまり、他言語の文字をまずは翻訳し、それを使用して自国の言葉や意味を表記したわけで、太安万侶も翻訳で頭を悩ませた一人なのかもしれないことがわかった。

おばあちゃんの話の中にも、ここで十分説明できないところがある。なぜなら、おばあちゃんは僕と違って関西弁だし、違う世代の言葉を使っているからだ。また、「センマイセンマイ」のように、『田原のくらし』の中でも、由来も説明されていない古代の言葉も使っていた。つまり、同じ日本語の中でも、昔のことや物を現代に伝えようとすれば、言語の

間の翻訳と同じように歴史や社会等の背景を考えないといけないのかもしれないと気付いたのだ。三日月の正月のもちについても歴史等から調べてみたら由来がわかるかもしれないし、そうすれば後の時代の人にも伝えやすくなるだろう。だからこそ、今、おばあちゃんたちにたくさん話を聞きたいと僕は思った。書いたものでなく、人から直接聞いた風習や物の由来の方が、その背後にあるものもあわせて伝えてもらえると思うからだ。それらの言葉や物の中には、太安万侶の頃からのものが伝わっているかも知れない。このように、伝統的な風習、文化を伝えるということは、言語の翻訳に通じるものだと考えた。両方とも、歴史や社会についての背景を考えた上でする作業だからだ。

近い将来リニア新幹線が奈良までくる。静かな村々も劇的に変わっていくだろう。その前に、見聞きしたいことが沢山あるが、それとともに、消えてしまうかもしれない目に見えるもの、見えないものをどう現代の言葉に翻訳してどのように伝えていくか、考えてみたいと思った。横浜に帰ってからおばあちゃんに電話で訊くと「風習は少しだけでいいから引き継いでほしい。何より、お嫁さんや孫には先祖を大切にする気持ちを忘れないで、ほしい」とおばあちゃんは言った。この願いや思いを伝えるのに、どんな工夫をした翻訳が適切か、僕は今この文章を書きながら考えているところだ。

歴史ある三八の市

上越教育大学附属中学校1年 ^{きなみ}木南 ^{れな}玲奈

私の身近に存在する、古くからあるものは、「三八の市」という朝市です。

三八の市は、私が小学生のころに苗や野菜を買ったりして何度か行ったことはありましたが、三八の市のことなど深く知りませんでした。しかし、実際に三八の市に行って訪ねてみたり、大人から聞き取りを行ったりしたら、初めて知ったことや感じたこと、分かったことがたくさんありました。

まず、三八の市とは、明治四十四年ごろからでき、地域の青年会が始めたものだそうです。私は、三八の市が百年も続いていることにとてもおどろきました。百年以上続けられるには、何かきっと理由があると思います。それは、三八の市の魅力だと私は思います。三八の市は、おじいさん、おばあさんがものを売っているのがほとんどですが、いろいろな種類のお店があります。例えば、野菜をどっさりとならべた八百屋や、珍しい海産物の加工品、のっぺやサメのフライなどの地元ならではの食べ物がたくさんあります。また、商品の種類が豊富なのも魅力の一つですが、三八の市の雰囲気も魅力の一つだと思います。雰囲気とは、生産者と消費者が、笑って話しながら買い物をしたりする、とてもなごやかな雰囲気が良いと思います。このなごやかな雰囲気が、ずっと続いてほしいです。

次に、朝市の良さとは、画一化されていないところだそうです。これは、朝市では、同じものを、たくさんの生産者が出します。そして、それが同じ棚に並びますが、その小分けの仕方や、値段や商品の質は、その生産者の個性が出ていてさまざまです。スーパーには出せないものや、スーパーでは買いたくても買えないものまであります。これが、画一化されていない、スーパーと違うところなのだと私は考えました。生産者一人一人の個性が出た商品を見るだけでも、買い物が楽しくなると思います。また、画一化されていないということは、消費者にとって良い所だけでなく、生産者にとっても良い所がありました。それは、生産者が、商品の価値をそれぞれ考えて売り、消費者がそれを見つけて共感できるかを判断することだそうです。これは、どういうものを、どういう量で、いくらで出せば、売れるかというのを考えることだと思います。一生懸命考えて、それを消費者に買ってもらうと、とても嬉しいと思います。

しかし、三八の市は、良いことだけではありません。三八の市の方で困っていることを聞くと、三八の市をやっていくための後継がないというのが多かったです。私は、三八の市をより発展していくために、三八の市をもっとPRして、皆さんに三八の市、朝市の良さを知ってもらいたいです。そうすれば、魅力が伝わって、三八の市に来てくれる人が増えると思うし、店を始めようとする人もいるかもしれないです。上越市の発展のためにも、もっと有名になってほしいと思います。

そして、三八の市の他に、上越市の四大朝市があるそうです。これは本で調べましたが、上越市には、「一の日市」、「四・九の市」、「二・七の市」、「三・八の市」というのがあります。一の日市では、鮮魚や乾物、生花、植木、青果、衣料品、履物などの生活的な商品が多いです。四・九の市では、四・九の市で商品を買った人に三十分無料駐車券を配るというサービスをしています。二・七の市では、「兵隊に新鮮な野菜を食べさせたいので、定期的な市が欲しい」という要望により、開催されたのが始まりだそうです。そして、三・八の市では、野菜をどっさりとならべた八百屋、珍しい海産物の加工品を扱う乾物屋、そして地元で揚がった新鮮な魚を扱う店がたくさん軒を連ねています。このように、四つの市それぞれに売っている物が違うことにおどろきました。その地域ならではの物が売ってるのかなと思いました。また、四つの市の朝市の始まった理由も知ることができて良かったです。それぞれの市の個性がでていて、とても良いなと思います。

次に、朝市とスーパーの違いのところは、朝市は画一化されていないということの他に、生産者との会話をしながら買い物を楽しめるところです。これは、すごく良いことだと思います。スーパーとは違って、店の人と交流しながら買い物をするだけで、楽しくなると思うし、欲しい物が安値で買えるときがあるかもしれません。しかし、そんな朝市も利用している人は、少ないような気がします。行ったことのない人には、あまりなじみがないと思います。また、何時にどこでやっているという情報は入りにくいし、若い人は朝市ではなくスーパーへ行く人がほとんどだと思います。スーパーの良いところは、朝市とは逆に、画一化されているところだと思います。遅い時間までやっていて、画一的で、いつも同じものがある、というのがスーパーの良いところです。

このように、スーパーにはない朝市の良さ、朝市にはないスーパーの良さがあることが分かりました。それぞれに適した人が来ることによって、便利になると思います。

最後に、朝市について私の考えは、朝市で売られている商品は、生産者の畑で取れた野菜などがほとんどだそうです。なので、畑で腐らせてしまうような余り物や、もう捨てて

しまう、スーパーなどに出せないものを、有効に利用するためには、朝市は大変良い仕組みだと思います。これは生産者にとっても、余った野菜などを、楽しみながら売ることができるし、消費者にとっても、新鮮な地元の野菜を安く買えるのはうれしいことだと思います。朝市は、たくさんの人達を作った、いろいろな商品が、一か所に集まって、そこで楽しさが生まれて、生産者も、消費者もうれしくなるものです。また、生産者と消費者が近所ということもあって、より親近感があります。私は、新鮮な野菜などが、安く売られていて、これで生計を立てられるのかと疑問に思いました。だからこそ人気なのかもしれないけど、もう少し高くて、みんなが利用するようなものを設けたら良いと思います。そして、朝市が行っている、地産地消をもっと進めて行ってほしいです。

三八の市について、たくさんの人に様々な質問をして、いろいろなことが分かりました。たかが朝市と思う人もいるかもしれませんが、私は朝市の深い意味や、良いところを知れて良かったです。また、生産者、消費者がそれぞれの思いがあって、それをじっくり考えることができました。これからは、三八の市だけでなく、私の身近に存在する古くからあるものがまだまだたくさんあるので、また訪ねてみたいと思います。

商店街の願い

板橋区立大谷口小学校5年 ^{すずき}鈴木 ^{すみれ}堇

私の住んでいる板橋区には、賑わいと活気あふれる商店街が百あり、その活力が街を元気にしています。私は、その中でも特に大きくて賑わっている、「ハッピーロード」の今と昔の事を調べました。

「ハッピーロード」には、洋服屋さんや昔ながらの和菓子屋さんなど、他の商店街にはないようなお店がたくさんあります。だから、毎日たくさんのお客さんが「ハッピーロード」におとずれています。特に、区民から愛されている「板橋のいっぴん」は、どれも作り手の創意工夫と温もりにあふれていて、お客さんに大人気です。

私は、「ハッピーロード」の今と昔を調べるために、「ハッピーロード」でお店を開いている人にお話を聞きました。最初に、手焼きのおせんべいを売っている高野屋さんに何年前からお店を出しているのか聞いてみました。高野屋さんは、「五十年前からだよ。」と、教えてくれました。私はとてもおどろきました。どんなに長くお店を開いていても、せいぜい三十年ぐらいまでだと思っていました。だから、高野屋さんがすごいと思いました。そして、五十年前と今のちがいを聞くと昔は、子どもを連れた人達が今よりもたくさんいて、賑わっていたそうです。高野屋さんは、またたくさんのお客さんで賑わってほしいと言っていました。次に、手作りの和菓子売っている岡田屋さんに話を聞きました。すると、岡田屋さんは、八十年前からお店を開いていて、高野屋さんと同じく昔の賑わいを、望んでいる事を教えてくれました。高野屋さんも、岡田屋さんも、昔ながらの手作りの物売りを、昔から今まで誰よりも「ハッピーロード」の事を長く見守り、たくさんのお客さんで賑わうようにがんばって来ました。それでも、商店街の賑わいは少しずつ減っていきます。それは、街にたくさん便利なスーパーマーケットができたからだと思います。

街には、商店街がたくさんあります。それと同時に、便利なスーパーマーケットや、コンビニもたくさんできました。スーパーなどに行くと、色々な物が一気に買えるので、すぐに買い物が終わります。その点、商店街に行くと新鮮なものが買えるけれど、買い物の時間がかかってしまいます。最近の人は、新鮮さではなく、時間を選びます。だから、商店街は賑わいが減ってしまっているのです。確かに、商店街は、時間がかかってめんど

かもしれません。しかし、商店街に行くと、新鮮でおいしいものや、そこにしかない昔ならではのものが買えて、お店の人達との交流も深まります。商店街では、スーパーでは、あじわえない楽しみがあり、最近の人は商店街の良い所を分かっていません。

今も昔も、商店街のふんいきは変わっていません。しかし、今と昔の人の心は変わって来ています。最近の人は、便利という言葉に負けて、新鮮、手作りという言葉が見えなくなって来ています。私は、一番大事なのは、時間ではなくお店の人の思いだと思います。商店街にならんでいる物は、お店の人がお客さんにおいしく食べてほしい、昔ながらの味を分かってほしいなどの思いがつまっています。だから、最近の人にも昔のように、商店街の人と交流を深め、友達の輪を大きくして、商店街を明るくできたら良いと思います。そして、街を元気にしたいです。

雁木と人

上越教育大学附属中学校3年 きたおか 北岡 ゆうき 勇気

私は新潟県上越市高田という町に住んでいます。上越市は日本でも有数の豪雪地帯でその中でも高田は、積雪の多いことで知られています。ここ数年は、温暖化の影響でしょうか、1～2メートル程の積雪ですが、私が幼稚園だった10年前は、積雪が5メートル以上となり屋根の雪を下ろしたり、道路の雪かきとの雪で道路は通行止めになりました。市内に交通規制がかかりトラックで一斉に雪を運び出すまでになったのです。40年程前までは、毎年のように、雪によってこのような状態になったそうです。そんな雪国、上越市には「雁木」と呼ばれる通路があります。雁木とは冬季間においても、地域の生産活動や商業活動を断ち切らせないために生まれた豪雪地帯特有の「冬の生活道路」でのことです。簡単に言うと、通りに面した軒から庇を長く出して、その下を通路としたものです。

上越高田ではその総延長は16キロメートルにも及びます。この通路があればどんなに雪が降っていても、雨が降っていても、楽に行き来できるのです。降雪量が多いと、足元に雪が積もり滑ったり、雪の凸凹につまずいたり歩くのさえ困難になります。雨風や強い陽射しをしのぎ、混雑する車両交通にも安全な通学路として現在でもとても有効に利用されています。

上越高田は江戸時代初めから城下町として整備が行われてきましたが、1665年の豪雪と地震により町が崩壊しました。それ以降、町人町では家々の庇を伸ばし連続し、今のような「雁木通り」が形成されたと言われています。

私の家族は3年前の春に、「雁木」の続く高田大町の町屋に引っ越しをしました。高田大町は江戸時代から続く商人の町で着物問屋等が軒を連ねていました。現在もその名残を多く残しており、旧今井染物屋は約150年前の江戸時代後期に建てられた商家で町屋の形式を残した歴史的建造物として修復され一般公開されています。「雁木」も、造り込式という母屋につながる古い形式を有しています。他にも「五十嵐ぬしや」「小川着物屋」「高野商店」「岸波もんや」等、江戸時代から続く吹き抜けの形式を持つ町屋が多く残っています。そんな中、私達家族は、築75年の「市川もんや」という町屋を購入しリフォームして暮らすことが決まりました。「もんや」とは着物に紋を入れる専門の職人の商店であるという

ことを家の持ち主であるおじいさんから聞きました。着物に紋を入れるのはとても細かい作業で、また埃があっては紋をきれいにすることができないため、築75年の町屋はピカピカに磨き上げられていました。家に使われている木材は黒光りし、壁の漆喰は味わいのある乳白色になっていました。とても魅力的で歴史を感じさせてくれましたが、いざ自分が住む家となると少し抵抗がありました。私は、イマドキのおしゃれな家に住みたいと思っていたからです。しかし、両親はせっかく高田大町に住むから、町屋の暮らしを経験してみようと購入することになったのです。両親は、古いものを大事にして、その町にあった暮らし方をしていきたいと言いましたが、この時は両親の考えに納得がいきませんでした。なぜなら、なんでも新しいもの、最先端なものの方が優れているし暮らしやすいに決まっていると思ったからです。

町屋の玄関には土間があり、玄関のすぐ横は商売をしていた6畳間があります。この6畳間は雁木通りから伺えるよう、玄関ともに木製木枠に全面ガラスの扉です。そして両隣家と壁がくっつき、窓をつくることが出来ない構造の町屋に明かりを取り入れるため、店、茶の間、座敷は、3階の屋根裏から吹き抜けになっています。2間の間口の玄関にうなぎの寝床のように細長い家があります。2階に上がる階段は、とても急で、上り下りするとギシギシと木がきしむ音がします。2階の床も木の板一枚の床です。2階も歩くとギシギシ。どこもかしこもギシギシでした。しかし、そんな町屋にも素晴らしいところがありました。どの部屋も障子が素晴らしかったのです。飾り障子といって細かい木の切子で美しい細工が施されています。近所の人やリフォーム会社の人が見て、皆口々に「素晴らしい、大事にしな、もうこんな障子を作る職人はいないから。」と言っておりました。この障子は、夏になると「簾戸（すど）」に替え涼しく夏が過ごせるようにもなっています。古いものも悪くないのではないか、と感じた瞬間でした。3年間この町屋に暮らし感じたことは、夏は部屋がひんやりとしてとても涼しく、冬は両側の家の壁がくっ付いていることで、とても暖かいということです。エアコンがなくても生活していける環境なのです。以前暮らしていた家では、断熱材や床暖房が入っていて、家自体の密閉度が高く逆にエアコンや暖房器具を使わないと生活できない状況でした。それに比べ、町屋は天然の風が吹き抜け、自然に寄り添った生活です。昔の人々の「自然と共存する」という心を、身を以て体感してします。

現代の社会生活は、個人主義が先行しています。家族も核家族となり、地域との結びつきが薄れています。しかし、私の暮らす上越市高田大町は、町内皆がとても理想的な関係

でつながっています。例えば、年3回の子ども神輿の出るお祭りには、町内皆が雁木に出て声援を送ってくれます。夏休みのラジオ体操もおじいさん、おばあさんから、孫の世代まで総出です。はじめは朝起きるのがつらく、めんどくさいと思うことが多かったけれど、町内の人と挨拶し、言葉を交わすことで人の温かみを感じることができました。また積雪の多い雪の日は、町内で一斉に雪かきが行われます。高齢者にとって雪かきは大変な重労働になります。だからこの高田大町は、自分の家の前の雪かきだけでなく、町内500メートルの通りを若者たちが主体になって全部の雪かきをします。私も雪かきを手伝います。こうして皆で助け合って生活しているのです。都会の生活では考えられないことではないのでしょうか。

現在、高田大町では「町並みフォーラム」という活動が行われています。雁木のある町並み、町屋を修復し再生しようという活動です。町並みを大切に保存していくということは、こうした人とのつながりも大事にしていくことにつながります。「雁木のある町屋」で暮らしてはじめて、町並み保存の本当の意味に気付かされました。皆さんももう一度、古いもの、昔のものに目を向けてみませんか、その良さに驚かされることでしょう。

戦争と戸籍

板橋区立板橋第三中学校3年 つかだ みつき 塚田 瑞輝

皆さんは、請求しても貰えない戸籍があるのを知っていますか。それは、無戸籍や保存年限が過ぎて廃棄されたものではありません。本来ならば、請求できるものですが「除籍消失につき謄本の交付ができません。」という証明書が発行されます。なぜでしょう。

それは、昭和十六年から二十年の間に起きた東京大空襲によって消失してしまったのです。もともと、戸籍には原本と副本があり、原本は区役所で、副本は東京法務局で、それぞれ保管されています。どちらか一方がなくなっても、再生できるようになっています。しかし、東京大空襲では、両方消失してしまいました。原本が消失しないように、地方疎開させていて戦火を免れた所もあったといいます。

私の住んでいる板橋区では、空襲に備えて特別な倉庫を造り、そこで大切な書類を保管していたそうです。それでも、一部の書類に被害が出てしまいました。それは、昭和二十年四月十三日の夜に起きた出来事です。区役所一帯が空襲にあいかなりの被害がでました。

生まれた時から現在まで、板橋区に住む私の祖父が、その時の事を話してくれました。当時九歳だった祖父は、栄町五番地に住んでいました。兄達は工場に行っており、また、弟妹達は疎開しており不在でした。一人残った祖父は、九歳にしては体が大きく、力もあったので、いろいろと頼りにされていました。近所に、自力歩行のできない人がおり、何かあった時には手助けを頼まれていたそうです。

その夜、突然空襲警報が鳴り響きました。外に出ると、上空を何機もの飛行機が飛んでいました。「今までの空襲とは違う。」と感じ、すぐに近所に走って行きました。歩けない人をリヤカーに乗せ、そのリヤカーを引いて逃げました。行く先々に焼夷弾が落ち、死ぬかと思ったそうです。空襲は、空が明るくなるまで続き、祖父は一晩中リヤカーを引いて逃げ回ったそうです。飛行機が去った後、あたり一面焼け野原で、池袋の方まで見渡せたといいます。また、近くの豊島病院にはケガをした人が多く運びこまれました。中には、腕や足から血を流しながら歩いて来る人もいたそうです。

この時の空襲で、板橋区の戸籍の一部が消失してしまったのです。しかし、消失してしまった戸籍も一部、再生した物があります。名前がわかる物を持っていた人もいましたが、何も証明する物が無い人もいました。口頭での自己申告で復活するような簡単な手続きで

した。そのため、名字や生年月日が違ってしまった人もいるそうです。

人や物を壊してしまう戦争は、こわいと思いました。しかし、争いが全くない世界も良くないと思います。なぜなら、たとえ、平和な世界であったとしても、小さな事でも争いは起きます。だから私は、争いが起きても、戦争のような大きな争いにならず、言葉での小さな争いで済む世界になってほしいです。

私が板橋区民として今できることは、祖父と同じように、自力歩行のできない人を、一人でも多く助けることです。そのために、まずは戦争について学ぼうと思います。

富士山という象徴性は何か ～世界文化遺産への登録をうけて～

渋谷教育学園渋谷中学校2年 ^{しらいし}白石 ^{ようこ}祥子

毎朝、登校する電車が多摩川を渡るとき、つい西の山際を眺めるくせがある。そこに、天気がいい日は富士山が見えるからだ。冷込みの厳しい冬晴れの日、とくに美しい、白い姿を魅せてくれる。

年に数回、新幹線で横浜から岐阜の祖父母の家へ向かうとき、やっぱり右側の車窓から富士山を探してしまう。車内アナウンスでもわざわざ知らせてくれる。東京から見ている時よりもとても大きく迫力のある富士山を見ることができる。

いずれにしても、トクした気分になるのはなぜだろう。

これは自分だけではない。老若男女日本人なら全員そうではないかと思う。富士山が(自然遺産ではなく)文化遺産として世界遺産に登録された理由に、「信仰の対象と芸術の源泉」という記述がある。

なぜ、信仰の対象となり、芸術の源泉であり続けるのか。

私たちがトクした気分させてくれる何かがこの答えのような気がする。

この夏、家族で富士登山をすることになった。古来信仰の対象として行われてきた富士登山について調べ、実際の体験を通して、この答えを考えた。

私たちは、吉田口五合目から登山を開始。五合目にある浅間神社に安全祈願のお参りをしてスタートした。お盆休み中とあって、登山客は登山道にあふれるほどで、半分以上外国人が占めるなど、想像していた登山よりかなりレジャー的様相の強い印象の中、登り始めた。

二時間ほど登り、七合目あたりから、急こう配の岩場になる。合わせて空気が薄くなり、動悸が激しく、頭痛もひどくなってきた。苦しかった。ただ、渋滞している列に押されて流されて予定通り山小屋へ着きたかった。正直言ってなぜこんな苦しいことをしているのかわからなくなった。

なぜ富士山に登るのか。富士山について調べてみた。

富士山は平安時代より神聖な地として崇められ、畏れられていた。それは、第一には際立った高さによるものである。「竹取物語」の最後に、帝は、かぐや姫から別れ際に渡さ

れた不老不死の薬をかぐや姫に会えないのであれば意味がないと、天に一番近い場所として富士山の山頂を指定し焼却させている。

また、当時は噴火を繰り返し（800、864、937、999、1033、1083年）、常時噴煙を上げ、夜は赤い炎も見えた恐れ多き山でもあった。噴火を鎮めるための浅間神社が建立されており、それは、信仰の対象としての原始的要因であったと思われる。

こうした神聖かつ急峻な、噴煙を上げる富士山への登山は、600年代から修験者による修行として始められている。これが一般の信仰のための登山として広まったのは江戸時代からである。「富士講」と呼ばれる富士山信仰の宗教が関東を中心に広まる。お伊勢参りなどと同様、日常的なご利益を求めたお参り登山が一般化した。当時、13世紀以降噴煙を上げなくなった富士山は、ただその美しい白いシルエットにより、恐れよりも、神聖かつ清浄な浄土としてのイメージの象徴として見られるようになっていたこともこのブームに一役買っていたのではないか。富嶽三十六景などの浮世絵に登場する富士山はどれも美しい。

美しい場所へ苦行を実践して到達することで、ご利益を望み将来を夢見る。それは宗教の力、信仰の力である。信じることで苦行を乗り越えそれを自信に変えていく宗教の力でこの苦しい登山を乗り越えたのではないか。

私たちはやっとの思いで夕方八合目の山小屋にたどり着いた。

数時間の仮眠をとった後、深夜には、頂上での御来光を仰ぐという目的のために、再び急な岩場をゼイゼイと登り始めた。夜が明ける直前に最後の鳥居をくぐり頂上へ出た。晴天のなか足元に雲海が広がり次第に太陽が昇る御来光を見た。美しいと思うのと同時に何ともいえないありがたい感情があった。

日常的にはほぼ宗教とは無縁で、かつ様々な事件のたびに宗教というものに何となく胡散臭い感覚さえ持つ私の中にも自然に宗教的な気持ちがあるのかもしれないと思った。生まれた時から、絵本にも、童謡にも、何にでも美しく、日本一高くて日本の象徴として扱われている富士山は、誰も何も言わなくてもどこか、ありがたく、勇気をもらえる心のよりどころにもなる存在になっているのかもしれない。そんな山でなければ、あの登山は続かなかっただけで、御来光がああ苦しみの目的にはなり得なかったと思う。

参考文献

『図説富士山百科—富士山の歴史と自然を探る』新人物往来社、2002年

『富士登山アドバイスブック』山梨県

雁木について

上越教育大学附属中学校1年 おおたに 大谷 まさひろ 将寛

自分の住んでいる町にあたりまえのようにある雁木。江戸、明治、大正、昭和、平成と時代がうつっても形を変えて今に残っています。厳しい雪国の環境の中で互いに助け合う思いやりの現れとも言える雁木について考えてみようと思います。

私達の住む上越市の高田地区は昔から豪雪地域として有名で、昭和20年には、3メートル77センチメートルという高さまで積もったという記録があります。そのため、道路や歩道は雪でうもれて、冬は交通が不便だったそうです。また、今でも冬になると天気が悪く、雨や積もらない雪もよく降ります。そのため冬は今も昔も足場が悪く、冬には困難な生活が続きました。そのため、かさは必需品でした。しかし、かさは荷物が入りきらずにぬれることもよくありました。そのため冬は、つくづく雁木がありがたいと思います。

さて、雁木とはどういうものなのでしょう。雁木は江戸時代に建てられたのが始まりだと言われています。また雁木の名前の由来は、鳥のガンが、ジグザグに飛んだ跡のように高さがバラバラだから雁木という名前になったと言われているそうです。雁木の造りには、大きく分けて2種類あります。一つは造り込み雁木で雁木の上に居住スペースがあるのが特徴です。昔はたくさんあったようですが、今ではほとんど見られません。もう一つが、現在高田のほとんどの雁木に使われている落とし雁木です。下屋の庇を伸ばした雁木です。落とし雁木のはばは、約180センチメートル（6尺）です。そもそも、雁木とは、家屋から街路に伸びた庇のことです。雁木は、民有地だけれど無税です。つまり、自分の私有地を歩道として使用してもらっている思いやりの結晶なのです。冬には雪や雨をしのいで、暑い日は、日影を作り直射日光を防いでくれたりと四季折々いろいろな季節に使える便利なものです。また道はばがせまい上越市では交通安全にも大きな効果をあたえています。雁木には高低差がたくさんあり、歩行者をつまずかせることもよくあります。高田の雁木は平行式雁木という母屋の棟軸方向が街路と平行になっている造りになっています。ほかにも妻側式雁木があります。これは、母屋の棟軸方向が街路に対して垂直な造りです。最近の雁木は木製だけではなくて、新しい家のつくりに合わせて様々な材質や形の雁木があります。高田は、雁木の総延長日本一をほこる長さです。現在の総延長は約16キロメー

ルです。ちなみに過去最高の総延長は約20キロメートルだったそうです。これらは全て雪国の人々の知恵や工夫や思いやりの精神が造ったものです。

このように私たちの生活に、大きな役割を果たしている雁木ですが、問題や話題になっていることもあります。一つは火災に弱いということです。どうしても家からせり出てる分だけ消火に時間がかかってしまうことと、家どうしが隣接しているため燃え移ってしまう可能性が高いためです。過去には、新潟市で2度大火が起こり、両側の雁木下を流れる焰に消防も手のほどこしようがなく、家財の搬出に苦しんだそうです。

もう一つは雁木自体が減ってしまっているということです。どういうことか地元の町の人やガイドの人に聞いてみました。「もともと雁木が多く残っている地域は、古い城下町の町並です。時代がうつりかわるにつれ中心部に住む人が少なくなり、郊外へと人口が移っていきました。そのため空き家となった町家が増え、必然的に雁木が減ってきてしまいました。またライフスタイルの変化や昔ほど雪が降らなくなったことから新しく家を建てる際に雁木を作らない家も増えてきました。つまり、雁木が高田に与える影響が少なくなってきたので雁木はへりつつあるのです」というお話しでした。

この話を聞いていたぼくは、残念な気がしました。なぜならば歴史ある物を取り壊してしまうのはもったいないと思うし、今まで調べてきて分かったと思いますが、雁木はとても便利な物で、家と家をつなぐだけの物ではなくて人と人をつなぐ物だとぼくは思いましたし、道の途中で雁木が切れているとなぜかその場所だけさびしい感じがしてもったいないと思いましたが、雁木は私有地を公道として使用してもらっているも同然なので雁木を出さない人は、そういう思いやりのない人たちのように感じとってしまいます。また、昭和20年のような大雪が降ったら、雁木がない土地は雪が積もってそこだけ身動きがとれなくなってまた交通が不便になってしまいます。だから残念だと思いました。

では、どうやったら雁木を守っていけるのでしょうか。一つは、住んでいる人が雁木についてもう一度考えることだと思います。雁木が身近にありすぎてあたり前のようになっていますが、様々なメリットが雁木にはあります。ぼくも雁木の事を調べる前まではあまり便利な物とは思っておらず、あるのがあたり前に感じていました。しかし今回、雁木の事を調べて、こんなに便利なんだと気付きました。そのため、住んでいる人が雁木とは何かをもう一度考えれば、その便利さに気付いてくれると思います。

もう一つは、雁木は人と人をつなぐものであり雪国の人々の優しさの表れだということです。今まで調べたように、雁木は雪国の人々が知恵や工夫や互いを思い合う気持ちの

結晶であるため、雪国の人を思っ作った特徴が多いということに気が付けば、雪国の人
の優しさがよく伝わってくると思いました。

この二つのことについて若い人、老いた人も、もう一度雁木について考え直してみたら
どれほど雁木が便利か、そしてありがたい存在か、大切な存在かということに気付いても
らえると思ひます。

ぼくは、今回雁木のことについて調べてきました。ぼくは今まであまりにも身近に雁木
があつてあまりその便利さに気付いていませんでした。しかし今回雁木について調べてそ
の便利さや知らない一面まで見つけられました。今回のこの作文は自分にもとてもため
になりました。とても楽しかったです。これを機会に雁木を通る時に何造りかを見たいと思
ひます。また、雁木について、もっと深くほり下げて調べてみたいと思ひます。また、雁
木はどのくらい強いのかを調べてみたいです。

武州鼻緒騒動から思うこと

毛呂山町立泉野小学校5年 いわの 岩野 きよか 清香

私は社会科の勉強が好きで、毎年夏休みの一研究で町の文化財に触れるものを取り上げ調べ発表しています。去年町内にあるお地蔵さんについて調べるため薬王寺というお寺に行ったとき、片隅に集められていたなかにあった風化し、摩滅していた角形の石塔が気になりました。町の図書館で町内の石仏が出ている本を見てみると、お寺で見た角形の石仏と同じものを見つけることができました。馬頭観音で天保10年に森茂吉という人が建立したと書かれていました。隣にあった如意輪観音坐像は、享和4年に脇坂徳次郎という人が村人の協力のもと建立したものとわかりました。そのときは気に止めなかったのですが、お母さんで行った坂戸の図書館で見た、武州鼻緒騒動という漫画の中で、昔埼玉にも差別にたいして立ち上がった人がいたんだということを知りました。そこで、中心で頑張った人たちの中に茂吉という名前を見つけました。薬王寺で見た馬頭観音の建立者の名前でした。名前が気にかかった私はもっと知りたくなり、図書館で毛呂山町史を借り鼻緒騒動の項目を探しました。けれど、一行も騒動のことは書かれていませんでした。なぜ、大きな騒動なのに町の歴史のことが書かれている本に載せていないのか私は、不思議に思いました。もしかして県史なら資料がでていないのではないかと思い、資料11騒擾という本で探しましたがやはり出ていませんでした。困った私は、司書のお姉さんにたずねると、鼻緒騒動の書かれている本を探してくれ「館内で読んでね」と、渡してくれました。

武州鼻緒騒動秘史という本で、読みにくい漢字、難解な意味が多く辞書で調べながら読みすすめました。

武州鼻緒騒動とは天保14年に、私が住んでいる毛呂山町の長瀬にある向井というところに住んでいた、穢多と呼ばれていた人が隣町の越生に鼻緒を売りに行ったとき事件が起きました。売りに行ったお店の人に鼻緒を安く買い叩かれ、抗議すると暴力を振るわれたことが発端でした。翌日向井村の人が越生のお店に抗議に行くと、お店の人が幕府のお役人に訴え向井村の人が97名逮捕され、江戸の牢屋へ送られ判決が下りるまでたくさんの向井村の人（49名）が拷問や毒殺などで亡くなったという事件です。

司書のおねえさんから教えてもらった、武州鼻緒騒動秘史という本は、事件のあった当

時少年だった人のお孫さんが、その家に語り継がれてきたことを本にまとめたものでした。町の図書館にも一冊しかなく、館内閲覧のみで館外への貸出はしていないといわれました。なんで大きな事件なのに、差別が昔もあったということを教えてくれる本なのに、事件のことを隠したがつているのではないかと私は不思議な気持ちになりました。今町内に鼻緒騒動のことを伝える遺跡のようなものは何も残されていません。

私が偶然見つけた、馬頭観音の石仏、読誦塔を建立した人が鼻緒騒動に関係していたのかどうかわかりませんが、もしそうならなんとか保存してほしいと思いました。今のままだと忘れ去られ風化して無くなってしまおうと思えるからです。ましてや鼻緒騒動に関係するものだからです。

差別やいじめは今もあちこちで見られます。私が通う学校でも投げかけられると嫌な気持ちなる言葉を言う人がいます。私も以前「マツコデラックス」というあだ名をつけられたことがあります。友達から「マツコ」とか、「デラックス」とかいわれると悲しくなります。5年生になった今もひそかに続けていることは、給食で食べる量をへらしていることです。

何で、差別やいじめがなかなか無くならないのでしょうか？人は誰でも自分より下の人を見つけ優越感にひたりたい気持ちを持っているのかもしれませんが。人に弱みを見せたくない、違っていると思われたくないという気持ちがあるからでしょうか。鼻緒騒動のことを町史に載せないのも、同じような気持ちが働いているのかもしれませんが。5年生になった私はインターネットの検索で、同和教育という言葉を知りました、と同時に部落という言葉も知りました。長瀬・部落という言葉がネットで検索できるから町でも町史に鼻緒騒動のことを載せないのかなと思うようになりました。大人の人が使う臭いものには蓋をしろという考えなのかもしれません。でも、差別に立ち向かった人たちが昔もいたことを、もっと大勢の人たちに知ってもらうためにも、図書館でも館内閲覧でなく広く館外へ貸し出すようにしたらいいのにと思いました。

町に残されている昔の様子を伝えるもの特に、屋外に置かれている石造物は、風化が進んでいるものが多く、昨年調べたときあったお地蔵さんが今年なくなったり、倒されたりしているものを見ると心が痛みます。多くの人々の心に差別や人が傷つく言葉を使うことがいけないこと、また屋外に置かれている石造物を大事にする気持ちが芽生えるといいなと思います。

土ぐうとはにわのちがい

横浜市立日限山小学校1年 とくやす 徳安 ゆうか 佑香

1、はじめに

なつ休みにぐんまけんにある『かみつけの里はくぶつかん』に家ぞくで行きました。そこにある『ほどだ古ふんぐん 八まんづか古ふん』を見ました。古ふんのまわりには、ねん土でできているたくさんのはにわや土きがならんでいました。

はにわは、きょ年のなつ休みに作った土ぐうとにいてたけど名まえがちがいます。はにわのほうがかわいいかおをしていました。なんでちがうのかふしぎに思いました。土ぐうとはにわのちがいをしらべました。

2、土ぐうについて

土ぐうは一万年くらいまえに作られました。高さは三センチメートルから四十五センチメートルくらいで人形くらいで、おもしろいかおをしています。見つかった土ぐうは、こわれているものが多いです。それは、びょうきがなおるように自分のみがわりとしてこわしたからといわれています。

また、ほとんどの土ぐうはおなかが大きかったり、おっばいがある女の人でした。これは母おやの強さや、おまじないができるみこの力をかりるためです。男の子はとっても強いのにむかしは女の子のほうが強かったのかな。

3、はにわについて

はにわは千七百年くらいまえに作られました。大きさは一メートルいじょうあります。わたしとおなじくらいです。かたちはつぼがた、円とうはにわがあります。わたしが古ふんで土きだと思ったのは、じつははにわであることがわかりました。つぼがたのものは、なくなった人に食べものをおそなえするのにつかいました。円とうはにわは、土がくずれのをとめるためにおかれました。ほかにも人や家、どうぶつ、ぶき、どうぐのかたちをしたものがあります。

このようなはにわはえらい人がなくなったときに、けらいのかわりにならべたとか、お

まつりのときにつかわれたといわれています。

えらい人があのように行ってもせんそうができるようにということでしょうか。今はおまつりのときはおみこしをかつぎますが、ぜんぜんかたちがちがいます。どんなおまつりだったのでしょうか。

4、まとめ

土ぐうとはにわはよくにしています、作られたじだいや大きさがぜんぜんちがいました。土ぐうは生きている人のために、はにわはなくなった人やおまつりのためにとつかわれたもちがうことがわかりました。

わたしが作った土ぐうのひみつが少しわかったようなきがします。ますますだいじになりました。

まだ作ったことがないはにわも作ってみたいになりました。

さんこうにした本

『じょう文、やよい、古ふんじだい』竹内まこと、フレーベルかん

(『地図でみる日本の歴史1 縄文・弥生・古墳時代』竹内誠総監修、フレーベル館、2000年9月)

『きゅう石き、じょう文、やよい、古ふんじだい』さとうかずひこ、あかね書ぼう

(『調べ学習に役立つ図解日本の歴史1 旧石器・縄文・弥生・古墳時代』佐藤和彦監修、あかね書房、1996年3月)

『きゅう石き、じょう文、やよいじだい』小和田てつ男、岩さき書店

(『人物・資料でよくわかる日本の歴史1 旧石器・縄文・弥生時代』小和田哲男監修、岩崎書店、2000年4月)

行ったところ

かみつけの里はくぶつかん (上毛野里博物館)

ほどだ古ふんぐん (保渡田古墳群) 八まんづか古ふん (八幡塚古墳)



かみつけの里 はくぶつかんにいきました。
こふんにはにわがありました。